

# 芸術祭が始まる

東京藝術大学美術学部絵画科准教授  
アーツ前橋チーフキュレーター

みやもと 宮本 たけのり 武典

## ④ 蚕にひきよせられる、芸術家の卵たち。

夏の養蚕を（夏蚕）、飼育する場所を整える作業は（整座）と言いい、脱皮直前の幼虫が動かなくなるのは（眠）に入るから。——本町六丁目で繭生産に取り組み「UNIT KIRYU」の川村徳佐さんとのお話は、こんなふうには聞けない養蚕用語のオンパレードです。

100年前、日本全国に220万戸あった養蚕農家は、現在はたった150戸。当時は夜になると屋根裏の蚕室から、蚕が桑の葉を一齐にかじる「ザーザー」という音が階下に降り注いでいたとか。蚕の音を聞きながら入眠して見る夢は、いったいどんな幻想だったのでしょうか。

日本人が何百年も聴き続けてきた蚕にまつわる言葉や音は今、消滅の瀬戸際にあります。古民家なら現代の生活様式に合わせて「再生」できますが、無形の音や言葉は、日常から一度消えてしまつたら、よみがえらせるのは困難です。令和8年の秋、桐生市と東京藝術大学が連携して、桐生の文化資源を活用した新しい芸術祭を開催します。その準備のため、この夏から藝大生

私たちの現地取材が本格化していますが、養蚕の風景に惹きつけられるメンバーが多いようです。先月号で紹介した3年生の弓月さんは、〈春蚕〉のお手伝いをした後、写真の油彩画《ころがっていく》を描きました。

蚕の幼虫は、〈天十虫（蚕）〉と書くように、桑の葉を求めて上へ上へと登っていく習性がありますが、その眼は明暗を認識できる程度。

夏蚕では、藝大の音楽学部器楽科でオーボエを学んでいる上條晴翔君が、蚕の音の録音とサンプリングに挑戦中です。



▶春蚕の繭



▲蚕の音を録音している様子



▲弓月《ころがっていく》

若い彼らの感受性が、消えつつある養蚕の風景からどんな音楽や幻想を（再生）するのか、とても楽しみです。

### パチリいい顔 桐生っ子

市内に居住する3歳まで（申し込み時）の桐生っ子を募集します。

詳しくは、市ホームページをご確認ください。

問い合わせ = 魅力発信課 (☎46-1049)



いまい せいじろう 今井 晴太郎ちゃん  
1歳6か月  
(新里町新川)



さいとう ひなた 齊藤 陽向ちゃん  
1歳5か月  
(広沢町四丁目)



にいどめ はな 新留 英奈ちゃん  
2歳8か月  
(東一丁目)



あらい あいな 新井 愛李菜ちゃん  
2歳11か月  
(相生町一丁目)